

〈令和3年度第1回長岡市文化財保護審議会〉

2021.08.19(木)

長岡市指定文化財 史跡 初君歌碑玉垣修復事業の結果報告

報告者: 鳴海 忠 夫

1 初君歌碑所在地

長岡市寺泊一枚田 5506 番地 愛宕神社境内

2 所 有 者

長岡市寺泊磯町 愛宕神社氏子会 (氏子総代 大和田幸次)

3 文化財指定年月日

昭和 54 年 3 月 29 日に寺泊町文化財(史跡)に指定。その後、平成 18 年の長岡市との合併で、長岡市指定文化財に継承された。

4 玉垣の破損状況

初君歌碑を取巻いた玉垣は、四隅の親柱を含めて 24 の石柱で構成されている。親柱は高さ約 65 cm、幅 15 cm、他の石柱は高さ 49 cm、幅 12 cm である。

玉垣は明治 30 年(1897)に設置され、上部に 2 本の鉄製のパイプで連結・固定されていた。設置から 100 数十年という長い年月が経ったことと、鉄製のパイプが腐食・膨張したことなどから、10 数年前から玉垣の半数近く(11 か所)にき裂と折損が認められ、見るに堪えない状況となっており、修復の必要性が認められた。

5 玉垣修復事業の経緯

- (1) 平成 30 年に愛宕神社氏子会役員で、玉垣修復事業について協議したが、予算などの面から修復事業を断念した。
- (2) 令和 2 年に、朽ちていた初君歌碑の標柱と案内板が、長岡市によって建て替えられたこと、長い間歌碑にかぶせてあった木製の覆いが撤去されたこと、菓子の大阪屋より、「令和 3 年 5 月頃から菓子の包装紙に、初君歌碑の写真を掲載してもよいか」との申し出があったこと(写真掲載許可済み)などから、氏子会役員が協議して、長岡市からの補助金を活用して、初君歌碑玉垣の修復事業の実施を計画した。
- (3) 愛宕神社氏子会の総意が得られたことから、令和 3 年度の事業の実施に向けて、令和 2 年 8 月に長岡市立科学博物館文化財係から、初君歌碑修復に伴う留意点並びに文化財保存費補助金交付申請の手続きや必要書類について指導を受けた。
- (4) 令和 3 年 4 月 15 日、氏子総代の大和田幸次から、長岡市に文化財保存費補助金交付申請書を提出した。

- (5) 同 16 日、市から補助事業採択の通知があり、玉垣修復工事に着手した。石材店二社による見積合わせにより工事業者を決定し、請負契約を締結した。

6 工事請負業者並びに工事期間、事業費、修復内容・結果

(1) 工事請負業者

燕市吉田浜首町 6—15 株式会社 泉谷石材工業所

(2) 工事期間

令和 3 年 4 月 20 日から 5 月 20 日までの間

(3) 事業費

473,000 円（内、長岡市からの文化財保存費補助金 236,000 円）

(4) 修復内容・結果

ア 全ての玉垣を取り外して、腐食した鉄製のパイプを玉垣から抜き取り、肉厚ステンレス製パイプを取り付けた。

イ き裂・折損した玉垣は、エポキシ樹脂ボンド及びモルタルで接着して復元した。合わせて、歌碑・玉垣の下にある台座のき裂も修復した。

ウ 工事業者の話によれば、大地震や土砂崩れなどがなければ、かなりの期間破損の恐れはないとのことである。

7 修復事業に対する市民からの反響

氏子会員並びに一般市民から、「きれいに修復されて良かった」「古い玉垣を残して良かった」「歌碑が見えやすくなった」など、修復事業に対する好反響が寄せられている。

■ 初君歌碑玉垣修復事業関係写真



新しく建て替えられた案内板



玉垣修復工事の作業状況



玉垣の破損状況(正面)



修復後の玉垣の状況(正面)



玉垣の破損状況(背面1)



玉垣の破損状況(背面2)



玉垣の破損状況(背面3)



修復後の玉垣の状況(背面)

遊女初君と初君歌碑について

鳴海忠夫

長岡市寺泊磯町の鎮守愛宕神社境内の一面には、遊女初君が歌人藤原(京極)為兼に贈った歌を刻した長岡市指定文化財 史跡 初君歌碑がある。初君歌碑は、昭和 54 年に寺泊町の文化財(史跡)に指定され、平成 18 年の長岡市との合併により、長岡市の文化財に継承された。第二次世界大戦前は、県内から多くの芸妓関係者が定期的に参詣に訪れ、賑わったといわれている。

永仁 6 年(1298) 3 月、^{さきのごんちゅうなごん}前権中納言であった藤原為兼は、歌界での二条家や冷泉家との対立、さらに政道に介入したとの理由などから、鎌倉幕府に睨まれて佐渡国配流となり、風待ちのために寺泊で 38 日間滞在した。寺泊滞在中の為兼の宿所は、当時この地方に勢力を誇っていた菊屋五十嵐家があてられた。五十嵐家の当主武兵衛は、為兼を厚くもてなし、遊女初君をそば近くに仕えさせたという。

為兼は、そば近くで献身的に尽くし、^{かぶおんきよく}歌舞音曲をはじめ和歌にも^{ひい}秀でた初君に心惹かれ、二人の間にロマンスが芽生えたものと思われる。後髪をひかれる思いの為兼は、佐渡へ渡る日、初君に「逢うことを またいつかはと ゆうたすき かけし誓いを 神にまかせて」の歌を贈った。別れを惜しむ初君は、「物おもひ こしちのうらの 白浪も たちかへるならひ ありとこそきけ」と詠んで為兼に返した。この歌には、為兼の無事と再会を祈る切ない女心が詠まれている。



史跡 初君歌碑(寺泊磯町 愛宕神社境内 昭和 51 年撮影)



初君惜別之図(寺泊荒町 聖徳寺蔵)

5 年後に赦されて、佐渡国から寺泊に上陸した為兼と初君の再開は叶わなく、二人のロマンスは成就することはなかった。都に帰った為兼は、その後^{ごんだいなごん}権大納言に叙任し、正和 2 年(1313)に勅撰の「玉葉和歌集」を編さんしたとき、巻 8 の旅歌の部にこの歌を収録した。

初君の^{しゅつじ}出自(素性)は明らかでなく、生年・没年とも不詳であるが、寺泊にいた 49 人の遊女の中でも、とびきりの美人で、しぐさも優しく気品があり、和歌の道にも^{ひい}秀でた女性とされている。今でいう才色兼備の女性ということになろう。初君は、磯町の土橋近くの磯山の下に住んでいたと伝えられている。

愛宕神社境内にある初君歌碑(新歌碑)は、2 代目の歌碑である。正徳 2 年(1712)に建てられた

初代の歌碑(旧歌碑)は、坂井町の佐野家(屋号「石塔」)前の「初君屋敷」にあったが、火災にあって破損し、碑面も見えにくくなったことから、新歌碑建て替えの計画が発願された。建碑発願者は明らかでないが、五十嵐家の当主貞茂や聖徳寺住職東山円雅らが、建碑運動の中心となったものと推定される。なお、旧歌碑も長岡市の文化財(史跡)に指定され、現在は史跡公園「聚感園」内に建てられている。

享和2年(1802)に歌人中院通知卿から初君御詠歌の御染を得て、新歌碑を初君屋敷に再建した。新歌碑は、その後弘化3年(1846)から明治までの間に、何らかの理由で佐野家前から愛宕神社境内に移されたものである。碑文は中院通知の揮毫、碑陰は国上寺桑門万元の撰文である。

初君歌碑は高さ1.5mほどで、石柵に囲まれている。長い間風雪にさらされたためか、碑に彫られた文字も薄れて判読しがたい。碑面には初君が詠んだ

有登 毛能おも飛こし路
巨曾 の浦乃志羅浪も
喜計 立可遍留ならひ

の歌が刻されている。一部に万葉仮名を用い、行を整えずに散らして書く「散らし書き」である。歌碑の側面には、

はやくありつる石ハ可けそこな者れた連はい万
□また中院通知のきみのこのうた志るしたまひ
しをゑりて建つるハ享和美つ能えいぬの秋なり

とあり、再建の由来と再建の年が刻されている。碑陰には為兼と初君の交わりと、越後人でただ一人和歌集に撰集された初君をほめたたえた名文が簡潔明瞭に記されている。碑陰の年号は「貞享紀元歳在甲子春三月十口八日 久賀躬山桑門万元記」とあるので、貞享元年(1684)3月に国上寺桑門万元が撰文したことが分かる。

初君歌碑(新歌碑)は、前述のように江戸時代の弘化3年(1846)から明治時代までの間に、佐野家前から愛宕神社境内へ移されたものと考えられるが、移転事由や経緯、年代は明らかでない。ただ、移転の年代は明治の可能性が高く、歌碑前にある右の石柱には、表に「長岡町 寄附人 舞鶴屋座中」、裏に「明治三十年三月建之」と刻されている。

石柱に彫られた明治30年(1897)という年号は、初君歌碑が佐野家前から愛宕神社境内へ移された年代の可能性が高いが、断定はできない。この時、歌碑が移されたのであれば、寄付者を募って歌碑周辺に玉垣をめぐらすなど、整備したのと考えられよう。移転先に愛宕神社境内が選ばれた理由は、初君が磯町の土橋近くの磯山の下に住んでいたと伝えられていることから、初君ゆかりの地ともいえる磯町の愛宕神社が選ばれたものと推定される。

また、歌碑を取り巻いた玉垣には、多くの寄付者と寄付金が彫られている。寄付者は地元寺泊と長岡の住人が大部分であるが、佐渡や高田の人からもあった。寄付者の職業は、置屋経営者もしくは芸妓を生業とする人たちと思われる。